アンの娘リラ

モンゴメリ・村岡花子訳

新潮文庫

344693

Title: RILLA OF INGLESIDE
Author: Lucy Maud Montgomery

アンの娘リラ

—第十赤毛のアン—

新潮文庫　モ－4－10

昭和三十四年十一月三十一日　発行
平成元年十一月十五日　五十七刷改版
平成二年二月二十日　五十八刷

訳者　村岡花子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Midori Muraoka 1959　Printed in Japan

ISBN4-10-211310-X C0197

新潮文庫

アンの娘リラ

—第十赤毛のアン—

モンゴメリ

村岡花子訳

新潮社版

アンの娘リラ

―第十赤毛のアン―

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第一章　『グレン村だより』ほかさまざま

暖かな、黄金色の雲のうかぶ心愉しい午後であった。炉辺荘の広い居間では女中のスーザン・ベーカーが陰にこもった満足ともいうべきものを霊気のように発散させながらすわっていた。時刻は四時。朝の六時からぶっ通しに働いてきたスーザンは休息と噂話の一時間ぐらいは持っていいだけの仕事をあげてきたという気がした。今、スーザンは申し分なくよい心持だった。この日は台所では万事が気味の悪いほどうまく運んだ。ジキル博士はハイドにならなかったのでいらいらすることもなかった。スーザンがすわっているところから彼女がこの上もなく自慢のたねにしているものが見えた――スーザンみずから手をくだして植え育てたぼたんの花壇である。真紅のぼたん、銀色をおびたピンクのぼたん、冬の雪の吹寄せを思わせる白いぼたんなどが咲き誇っているさまはグレン・セント・メアリー村じゅうのどのぼたんも及びもつかぬものだった。

スーザンはマーシャル・エリオット夫人でさえ着たこともないほど手の込んだ新調の黒絹のブラウスを着こみ、幅がたっぷり五インチはあるいりくんだかぎ針編のレースに、もちろんそれに似合った挿しこみのはいっている白い糊のきいたエプロンをかけていた。それだか

ら、スーザンは立派にみなりをととのえているというおおどかな気分で「毎日新報」をひろげ、グレン村の『記事』を読みにかかった。この『記事』はミス・コーネリアが今しがた言った通り、欄の半分までが炉辺荘の者たち一人一人のことでうまっていた。新報の第一面には大きく黒い見出しでフェルディナント大公とかだれとかがサラエボという気味の悪い名前の場所で暗殺されたと書いてあった。しかし、スーザンはそんなつまらない取るに足りないことにいつまでも目をとめてはいなかった。スーザンの求めるのは真に重大なる事柄であった。ああ、ここだ――

『グレン・セント・メアリーだより』。スーザンは鋭く目を据え、そこからあますところなく満足を絞り取ろうとするかのように、一つ一つ声を出して読んでいった。

ブライス夫人と客のミス・コーネリア――別名マーシャル・エリオット夫人――はベランダへ通じる扉のそばで話をしていた。扉口から吹き入る涼しい快い微風は、庭から幻想的な匂いと、リラやミス・オリバーやウォルターが笑ったりしゃべったりしている蔦の垂れ下がった一隅の楽しそうな賑やかな声のこだまを運んできた。リラ・ブライスがいるところにはどこでも笑いがあった。

居間にはもう一人、寝椅子にまるくなっているものがいた。これも見のがすわけにはいかない。それは特異な性質を有し、スーザンに心から嫌われているただ一匹の生きものという栄誉をになっているからである。

猫というものはどれもみな得体の知れないところがあるが、『ジキル博士とハイド氏』

――略して『博士』――は普通の猫の三倍もそうだった。『博士』は二重性格の猫なのである――そうでないとすればスーザンが断言するように悪魔に取っつかれた猫であった。そもそもこの猫にはその存在の最初からなにか薄気味の悪いものがまつわっていた。四年前、リラ・ブライスは一匹の子猫を大事にかわいがっていた。雪のように白く、しっぽのさきが粋な黒になっており、これにリラはジャック・フロスト（霜の精）という名をつけた。スーザンにはこれという確かな理由はなかったが、ジャック・フロストが大嫌いだった。

「いいですか、奥さん、あの猫はろくなことをひきおこしはしませんよ」

と、スーザンは不吉なことを口癖のように言った。

「でも、なぜそう考えるの？」

と、ブライス夫人にきかれると、

「考えるんじゃありません――わかるんです」

としか、スーザンは答えなかった。

炉辺荘のほかの連中はみなジャック・フロストをかわいがっていた。たいそう清潔でよく身づくろいをし、その美しい白い服に一点のしみや汚れをも見せたことがなかった。かわいらしいようすで喉をゴロゴロ鳴らしたり人にすり寄ってきたりし、徹頭徹尾正直であった。

ところが炉辺荘の一家に悲劇が起こった。ジャック・フロストが子猫をうじゃうじゃ生んだのである！

スーザンの得意さは形容の言葉を探そうとしても無駄であった。あの猫がまやかしもので

人をはめこむ奴だということが今にわかると、わたしが前々から言っていたじゃありませんか。これであんた方にもわかったでしょうが！

リラは子猫の中のごくかわいいのを一匹だけとっておいた。みかん色の縞が入った濃い黄色の毛皮は特別なめらかで光沢があり、繻子のような金色の大きな耳をしていた。リラはゴールディ（金色のもの）という名をつけたが、この名前は小さなじゃれまわる子猫にはぴったりしているようだった。ゴールディはその邪悪な本性を子猫時代にはみじんもあらわさなかったのである。もちろん、スーザンはあの悪党のジャック・フロストの子孫からいいことが起こるはずはないと家族の者たちに警告したが、カサンドラ（訳注　トロイの不吉な女予言者）さながらのスーザンの暗い予言には誰ひとり気をとめなかった。

ブライス家ではジャック・フロストを男性の一員とみなしていたので、その習慣から脱けられなかった。そのため絶えず男性代名詞をつかったが、結果は滑稽なものだった。リラが何気なく、「ジャックと彼の赤ちゃんが」と言ったり、またはゴールディにむかって厳しく、「お母さんのところへ行って彼に毛皮を洗ってもらいなさい」と命じたりしているのを聞いて、訪問客は仰天するのが常だった。

「奥さん、これは聞き苦しいですよ」

これにはスーザンも弱りきってにがい顔をしていつも文句を言った。スーザン自身も妥協してジャックのことをいつも「それ」とか「白いの」とか言い、「それ」が偶然、次の冬に毒にあたって死んだとき、少なくともスーザン一人だけは胸を痛めなかった。

一年たつと、『ゴールディ』という名前はみかん色の子猫にはいかにも不似合いになってきたので、ちょうどそのときスティーヴンソンの物語を読んでいたウォルターが『ジキル博士とハイド氏』という長い名前に改めた。『ジキル博士』的気分のときのこの猫は眠たげな、愛情深い表情で、家族に親しみ、家族の一員らしくざぶとんの上に丸まっているニャー公であり、かわいがられるのが好きで、抱いたり撫でたりされて目を細くしていた。特にあおむけにひっくり返り、なめらかなクリーム色の喉をやさしく撫でてもらうのが大好きで、うっとりと満足そうにゴロゴロ喉を鳴らした。ゴロゴロいうことにかけて『博士』は有名だった。炉辺荘に飼われた猫で明けても暮れてもこれほどうれしそうに喉を鳴らす猫はかつてなかった。

「猫でたった一つうらやましいと思うのはゴロゴロ喉を鳴らすことだな。この世で最も満足した声だよ」

と、ブライス医師がいつか『博士』の朗々たるメロディに耳を傾けながら洩らしたことがあった。

『博士』はたいそう器量よしだった。その動作はすべて優美であり、態度には威厳があった。薄黒い輪のある長い尾を足のあたりに畳みこみ、ベランダにすわって長いこと虚空をじっと見詰めているところは、エジプトのスフィンクスでも守り神としてこれ以上にはいくまいと、ブライス一家には思われた。

ハイド的気分が起こってくると――それは必ず雨や風の前に起こるのであるが――猫は目

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

付きも変わって狂暴になるのだった。この変化はいつも突然にきた。おそろしい唸り声と共に冥想からあらあらしく跳ね起き、引きとめようとしたり撫でようとする手に嚙みついた。毛皮の色は濃さを増し、目には凶悪な光がうかんだ。実際この世のものならぬ美しさがあった。この変化が夕暮に起きたときは炉辺荘の人々はみなこの猫に一種の恐怖をおぼえた。そのようなときには『博士』は恐ろしいけものであり、かばってくれるのはリラだけで、「かわいいうろつきやの猫なのよ」と言った。うろつくことは確かだった。

ジキル博士はしぼりたてのミルクが好きだが、ハイドはミルクには触ろうともせず、がみがみ不平を鳴らしながら肉を食べた。ジキル博士は人の耳に入らないほど音もなく階段を下りてくるが、ハイドは男のような重い足音をたてた。夕方、スーザンが一人きりで家にいるとき、この音で「びっくり仰天」したことが何度かあった。ハイドは台所のまんなかにすわりこみ、一時間もの間、まばたき一つせずにその物凄い目をじっとスーザンに据えていた。このためスーザンの神経はかきみだされたが、哀れなスーザンはハイドを心から恐れているので、追い出すこともできなかった。一度、思いきって棒きれを投げつけたことがあった。すると、ハイドは即座にスーザンに向かって獰猛に一跳ねした。スーザンは外へ逃げ出し、二度とハイドにかかわりあおうとしなくなった。――もっとも、ハイドの悪事の報いとして罪のない『ジキル博士』のほうがハイドのあとぬぐいをさせられた。『博士』がスーザンの領土に鼻を突っこむたびに容赦なく追い払われ、ほしくてたまらないご馳走ももらえなかったりした。

「フェイス・メレディス嬢、ジェラルド・メレディス君、ジェイムズ・ブライス君の多くの知友は」と、スーザンはまるでそれらの名前が美味ででもあるかのように舌なめずりして読んでいった。「二、三週間前、レドモンド大学から帰郷した三君を喜び迎えた。一九一三年に文科を卒業したジェイムズ・ブライス君は現在医科の一学年を終えたところである」

「フェイス・メレディスはまったくわたしが知っているうちじゃ一番器量よしの娘になってきましたよね」と、ミス・コーネリアが編みものをしながら批評した。「ローズマリー・ウエストが牧師館へ行って以来、あの子供たちの進歩は驚くばかりじゃありませんか。今じゃあの子たちがどんな腕白小僧だったかおぼえてる人なんかないほどですからね。ねえ、アン、あの子たちがどんなにふざけまわったか忘れはしないでしょうね？　ローズマリーはあの子たちとまったくびっくりするくらいうまくいっているじゃありませんか。継母というよりも親友のようですよね。子供たちはみんなローズマリーが大好きだし、ユナときたらあの人を崇拝しきっていますからね。あのブルース坊やにはユナはまったくの奴隷みたいに夢中ですよ。もちろん、ブルースはかわいい子ですよ。だけど、エレンにそっくりなこと、あれくらい伯母に似ている子って見たことがありますかね？　伯母に劣らず色は黒いし、断固としているしね。ローズマリーに似ているところは一つもないじゃありませんか。ノーマン・ダグラスはいつも、コウノトリはブルースをわしとエレンのところへ届けるつもりだったのを、間違えて牧師館へ持っていってしまったんだと、大声で断言していますよ」

「ブルースはうちのジェムを崇拝しきっているんですよ」と、ブライス夫人が言った。「ブ

ルースはここへくると、小さな忠実な犬のように黙りこくってジェムのあとをついてまわり、黒い眉毛の下からジェムを見上げているんです。ジェムのためならどんなことでもするでしょうと、わたしは思いますね」

「ジェムとフェイスは結婚するんですかね？」

ブライス夫人は微笑した。ひところは男嫌いとして毒舌を振ったミス・コーネリアが盛りを越した年になって縁結びに凝り出したことは周知の事実であった。

「まだ、仲のいい友達にすぎませんよ、コーネリアさん」

「図抜けて仲のいい友達ですよね、まったく」と、ミス・コーネリアは力をこめた。「若い連中の振舞はいっさいわたしの耳に入りますからね」

「メアリー・ヴァンスがおさおさ怠りなくあんたの耳に入れているに違いないですね、マーシャル・エリオットの奥さん」と、スーザンが意味ありげに言った。「けれど、子供たちのことを縁組のどうのと言うのは恥ずべきことだと、わたしは思いますね」

「子供たちですって？　ジェムは二十一だし、フェイスだって十九ですよ」と、ミス・コーネリアがやり返した。「世の中にわれわれ老人だけが、おとななんじゃないということを忘れてはいけませんよ、スーザン」

自分の年齢のことを言われるのを嫌うスーザンは――それは虚栄からではなく、働くには年を取りすぎていると周囲から考えられはしないかという恐怖が絶えずつきまとっているからであった――腹を立て、再び『記事』に戻った。

「カール・メレディス君とシャーリー・ブライス君は先週の金曜日の晩クイーン校から帰宅した。カール君は来年、港岬小学校に赴任する由、人望のある立派な教師となるであろう」

「とにかくカールは虫のことならあらんかぎりのことを子供たちに教えるでしょうよ」と、ミス・コーネリアが言った。「もうクイーン校を卒業したのだから、メレディスさんもローズマリーもまっすぐレドモンドへ行かせたがっているのだけれど、カールにはごく独立心の強いところがあってね、学資の一部分は自分で働き出して大学を出たいと言うんですからね。そのほうがいいでしょうよ」

「この二年間ローブリッジで教鞭をとっていたウォルター・ブライス君が辞職した。今秋レドモンドへ行くとのことである」

スーザンは読んでいった。

「ウォルターはもうレドモンドへ行かれるだけの体になったのですかね？」

ミス・コーネリアは気づかった。

「秋までには丈夫になってくれればと思っていますのよ。ひろびろした戸外で日光に当たってのんびり夏を暮らせばたいそう効果がありましょうよ」

と、ブライス夫人が答えた。

「腸チブスはなかなか直りにくいですよ」ミス・コーネリアは強調した。「ことにウォルターのように命拾いをした場合はね。大学へ行くのはもう一年待ったほうがいいと思いますね。

だけど、ウォルターはすっかり意気ごんでいるしね。ダイとナンも行くんですか？」
「ええ、二人ともう一年教壇に立ちたいと言うんですけれど、ギルバートがこの秋はレドモンドへ行かなくてはいけないと申しますの」
「それはいいあんばいです。二人でウォルターを監督して、あまり一生懸命に勉強させないよう気を付けるでしょうからね」ミス・コーネリアはスーザンをちらっと横目で見ながら、「さっき剣突を食ったばかりで、ジェリー・メレディスがナンにモーションをかけているなんて言ったらまたまたやられるでしょうね」
スーザンは知らん顔をしていた。ブライス夫人は笑い出した。
「ねえ、コーネリアさん、わたしも手いっぱいですわね――この息子たちや娘たちがわたしのまわりで恋をしているのではね？　真面目に考えていたら押し潰されてしまいますわ。でも、わたしは真剣にはとりませんよ――あの子たちがおとなになったとはまだどうしても思いこめませんもの。あの背の高いわたしの息子二人を見ると、これがこの間、わたしがキッスしたりかかえたり子守歌をうたって寝かしつけたりしたあの肥えたあどけない、えくぼの寄った赤ん坊かしらと思いますよ――ついこの間ですよ、コーネリアさん。あの『夢の家』ではジェムが一番かわいい赤ん坊でしたわね？　それが今では文学士で、求婚中だなどと言われるのですからね」
「わたしらはみんな年を取りましたよね」
と、ミス・コーネリアのマーシャル夫人は溜息を吐いた。

「わたしに年を取ったなと感じさせるただ一つの部分はグリン・ゲイブルス時代にジョシー・パイがわたしをけしかけてバリー家の棟木を歩かせたときに挫いた踝ですわ。東風が吹くたびに痛むんですの。リューマチだとはみとめまいとしているんですが、痛いんですのよ。子供たちといえば、あの子たちとメレディス家の子供たちで、秋、学校へ戻る前にたのしい夏をすごす計画をたてておりますわ。まったく遊び好きの人たちですよ。おかげでこの家は絶えず賑やかな渦の中にいますの」

「シャーリーが帰ってきたら、リラはクイーンへ行くんですかね？」

「まだ決まっておりませんの。わたしは行かないほうがいいと思うんですよ。一つにはあの子の父があの子にはそれだけの体力がないと考えているせいもありますの――体力の及ぶ以上に成長しすぎていますもの――実際、十五にもならない子供にしては途方もなく背が高いですからね。あの子が行くことにはわたしは乗気じゃありませんの――だって、この冬、わたしと一緒に家にいてくれる赤ん坊が一人もいないなんてたまりませんわ。スーザンとわたしは退屈しのぎにとっくみあいでも始めるでしょうよ」

この冗談にスーザンはほほえんだ。『奥さん』ととっくみあいをするなんてまあ！

「リラ自身は行きたがっているんですか？」と、ミス・コーネリアがきいた。

「いいえ、実をいえば、家の子供の中で野心を持合わせていないのはリラだけなんです。もう少し野心家であってほしいと思いますのよ。真面目な理想など全然持合わせておりませんからね――あの子のただ一つの望みは愉快にすごすことだけらしいんですの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton